



日刊 **ゲンダイ**

平成10年10月22日

新米ぴゅあコシヒカリ熟女タイプ



イラスト・前田裕樹

近ごろ「農」に興味を持つている。特に「米」にである。
かつて農家は、いい米はすべて供出し、カスのような米を食っていたという。減反政策以降それが様変わりし、供出する米は適当に作り（ほどほどの手間ひまをかけるの意）、勤めに出るなど他に職を持ち、自分の食う米には情熱と云うていい手間ひまをかけるのだという。つまり彼らだ

年、月に2度10⁵ずつ送ってもらっているのだが、彼の米は実にコンスタントにうまいのだ。
今回届いた新米に、メッセージが添えられていた。「この春、近所の老人たちがどこかで変でした。例年より1カ月近く前から田植えの準備をしだしたのです。気象データにあたってみると、確かに20日くらい季節が前倒しされた感じになってます。長く百姓をやってきた人たちは、体が気象の変化を感じるようになります。」
小林青

けが本当にうまい米を食っているわけだ。

彼だが、8月下旬の豪雨と9月の台風には泣かされた。それらは実の充実と刈り入れの時期に重なったのだ。しかし彼は、豪雨も台風もひっくるめて自然なのだと言いつつ、よりうまい米作りに励むと宣言している。頼もしいではないか。

ならばその米を食いたいたではないか。しかしそれらはごく一部の高級寿司店等に供給されるのみで、われわれの口にはなかなか入らない。ところがよくしたもので、手間ひまかけたうまい米を作り、それを契約者に供給し、自らの農を成立させようという人も現れる。私の故郷の近く、群馬県板倉町の小林信哉青年もその一人で、私はこの1だ。
私は今、減量中なん